活動報告

保育士の資質向上に向けた研修について
～大分市東部地区年齢別研修を通して～

相　浦　雅　子

For Improvement of Nursery School Teachers' Abilities:
Workshops for Nursery School Teachers in Charge of Different Age Classes
in the East District of Oita City

Masako AIURA

【はじめに】

平成20年に保育所保育指針が改定され、告示化された。このことにより、昨年度の保育会ではあらゆる研修会が催され、その中身は、新保育所保育指針の中で何がどのように変わったかなどが中心であった。今年度、新保育所保育指針をもとに実際に運用していきながら、保育の質や保育士の資質向上をどのように図るのか課題である。保育所保育指針解説書には、改定の要点に⑷保育の質を高める仕組みとして、「保育所においては、保育課程、指導計画に基づく保育士等による保育実践の振り返りを重視するとともに、保育の内容等の自己評価及びその公表を努力義務としています。」とある。また、「職員が保育所の課題について共通理解を深め、体系的・計画的な研修や職員の自己研鑽等を通じて、職員の資質向上及び職員全体の専門性の向上を図ることを求めています。」としている。本文中には、保育士の自己評価及び研修については、「第４章　保育の計画及び評価」の「２　保育の内容等の自己評価」の「⑴　保育士等の自己評価」と、「第７章　職員の資質向上」の「１　職員の資質向上に関する基本的事項」、「３　職員の研修」に掲げられている。

これらをふまえて、大分市東部地区においては、平成21年度年齢別研修の在り方を検討し、主任保育士が中心となり事例検討会を年間２回行うこととなった。研修会を行う前に、主任による研修の趣旨が作成され、その趣旨に添った会の運営が行えるよう、まず、12ヶ園の主任が２人ずつ組み、各年齢の担当となり、司会進行及びスーパーバイザーの役割を果たす。各担任は、決められた書式に事例を記入し、持ち寄る。研修会当日は、２園の事例を取り上げ皆で検討する。助言者は、その状況に応じて、浮き彫りになってきた課題について掘り下げていく。今回は、事例検討の中身ではなく、研修会の在り方について報告を行う。

【研修会の実態】

⑴　第一回

①趣旨

事例検討会を通して、養護と教育が一体となった保育を行い子ども達が心身共に健康・安全で安定した生活を送れるように育ちを支え、保護者の状況や意向を受け止め保護者とのより良い関係を築いていく。また、事例検討会を通して自己評価を行うことで、保育の質と保育士の資質向上を図り、専門職として

の責務を果たすことに繋げていく。ここで、注意しなければならないことは、プライバシーの保護で事例検討会で知り得た個人の情報や秘密は絶対に守ることである。

②研修日程

6月27日（土）	全体会	14：00～16：00
7月 7日（火）	5歳児	14：00～17：00
7月14日（火）	4歳児	14：00～17：00
7月21日（火）	3歳児	14：00～17：00
7月22日（水）	2歳児	14：00～17：00
7月28日（火）	1歳児	14：00～17：00
7月29日（水）	0歳児	14：00～17：00

③書式

保育園名	歳児	記　録
1．問題点		
気になるところ		
Episode		
保育者の意図と考察		
2　基本事項		
①名前		
②年齢		
③入園年月日		
3　家族の状況		
①両親の有無・年齢・職種		
②兄弟姉妹の有無、年齢		
4　生育歴		
①基本的な生育歴		
②妊娠時、出産時の異常		
③出産以降の疾病等		

5　入所時から現在まで	
①入所時に気づいていたこと	
②それを元にどのようなことに気をつけて現在まで保育をしてきたか	
6　現在の状況	
①本人の状況	
a 身体の状況	
b 生活リズム	
c 基本的生活習慣	
d 食事	
e 遊び、認識	
f 対人関係	
g 情緒、心の安定	
h 言葉	
i 描画	
②家庭の状況	
a 家族の状況	
b 親の子どもへのかかわり	

④気づき

・エピソードの書き方が箇条書きや簡単にまとめられているものがあり、子どもの細かい状況の記述に欠けている。
・保育者の意図と考察については、明確に示されているのものが少なく、実態の記述のみのものもある。
・質問は、生育歴や家族、子どもの気になる行動に関するものが多く、保育者の意図や考察に対する疑問はあまりない。
・進行役の主任の働きにより、全員が質問及び感想を述べ合うことができた。
・助言者からの質問や提案に、それぞれに意見を出すことができた。
・すべての年齢において、子どもに添う保育を

意識し抽出児の内面の理解を課題とした。

⑵　第２回

①趣旨

「一人ひとりの発達をふまえた保育実践」を行うということは、子どもの活動の様々なエピソードを捉え、そのエピソードから背景や要因を見つけ出し、子どもの発達状態を把握して、どのようにかかわり支援していけばよいのか、事例検討を通して問題点を解決していくことである。今回、第２回目事例検討会の趣旨は、今までの子どもへのかかわりで自分自身の保育の見直しを行い、改善して保育計画を立案して保育実践することである。つまり、計画→実践→評価→改善して行動を起こすこと、PDCA サイクルを知ることである。

②研修日程

10月13日（火）	２歳児	14：00～17：00
10月15日（水）	４歳児	14：00～17：00
10月16日（木）	３歳児	14：00～17：00
10月20日（火）	０歳児	14：00～17：00
10月26日（月）	１歳児	14：00～17：00
11月 6日（金）	５歳児	14：00～17：00
11月14日（土）	全体会	13：30～16：00

③書式

保育園名	歳児	記　録
１．問題点		
自己評価		
改善計画		
Episode		
考察		
今後の課題		

④気づき

・評価と考察、今後の課題が明確に記載されているものが少ない。
・エピソードの捉え方が具体的になり、子どもの姿がわかりやすくなっている。
・考察としての深まりが足りない。
・子どもの捉え方が、第１回よりも肯定的で温かくなっている。
・質問や意見の出し方が、積極的である。
・第１回から第２回目までの自分自身の保育の振り返りがしっかりできている者が多い。
・他園の事例に対し、気持ちを込めて考える姿がある。
・子どもの変化から、保育者の変化を読み取ることができている。

【研修を終えて】

今回、わずか３ヶ月間をおいての２回の研修ではあったが、保育者にはかなりの変化を見出すことができた。その要因として、いくつか考えることができる。一つは、同年齢の担任による事例検討会であったこと。他園の事例であっても、今、自分が担任している子どもと同じ年齢であることからイメージもしやすく、より具体的に問題点を考え易かったのであろう。次に、取り上げる園の担任だけが事例を書くのではなく、全員が同じ書式で自分のクラスの子どもについて記録をとり提出した。このことから、３時間の研修に臨む姿勢が自ずとできていたのであろう。また、１園から１名の参加であり、参加者には園代表としての責任感があったのではないかと思われる。これらの前提要因を

ふまえ参加者が真摯な姿勢で研修に臨んだことから、他保育士の意見を素直に聞き入れ、自分の視野を広げ、さらに、子ども観や保育観を見つめ直すこととなったのではないだろうか。

しかし、保育士達の記録する力がまだまだ未熟であることは否めない。懸命に子どもに寄り添い、内面の理解を深めようと省察するも、それを言語化し文章化することにとまどい、適切な表現ができていない。子どもの姿から考えたことを明確に言語化することは、さらなる省察に結びつける重要な過程である。保育士の省察力を深めていくためには、園内研修や地区における研修会の在り方を考えなくてはならないであろう。

今回の研修会では、第２回の趣旨にある「計画→実践→評価→改善」の循環をいくらか実感することはできたのではないか。評価の視点を明確に捉えるためには、事例の読み取り、つまり、エピソードをどのように省察するかがポイントとなる。しかしながら、保育士だけでの省察は表面的なものとなり、子どもの内面の育ちにせまる視点は得られなかった。園は違っていても保育所生活の流れはほぼ似通っており、12人の保育士達は感覚的に理解し合える環境にあった。今回は、助言者という違う立場の参加者がおり別の視点を与えることができたが、主任保育士がこの役割を果たすことができることが望ましいのではないか。保育所内において、スーパーバイザーの役割を誰がとれるか、園内研修の課題となる。

保育所保育指針には、評価の視点として、「子ども一人一人の育ちをとらえる視点」と「自らの保育をとらえる視点」が含まれるとしている。いずれも、ねらいと内容の達成を評価するわけではあるが、それは、活動の結果のみを評価することとは違う。子どもの行動の変化は内的世界の変化であり、同時に、保育士の子どもへの願いの変化が大きく影響することをふまえ、評価しなくてはならないのである。今回の研修で、「何もしていないのに、子どもが変わってくれた」との報告があったが、第１回の研修で他者からの助言を受け入れたことで、保育士主体の保育から子ども主体の保育に変えることができ、その結果、子どもの気になるところが気にならなくなったのである。これは、保育所保育指針にある「保育士等の学び合いとしての自己評価」である。十分なる省察の後の自己評価は、保育の質の向上に欠かせないものといえるであろう。

最後に、第２回の研修会においてある保育士が、「よかった～。あの子はどうなったのだろうと心配だったけど、いい方向に変わって本当に良かった。嬉しい。」と、にこやかに語ってくれた。この言葉は、保育士の専門性とは何かを改めて考えさせられた。この言葉が示すことを元に、今後、保育の質、保育者の資質、保育者の専門性等について明らかにしていくことが課題として残った。